

倉地佑加子

I. 研究目的 我国の水田は食糧生産の場としての機能に加え、両生類や魚類、それらを捕食する鳥類など、多くの生物の生息場所としても重要な役割を担っている。しかし、1970年からの減反政策により、水稻作付面積が減少し、これらの生物の生息環境が失われた。その影響は、鳥類のような高次消費者になるにつれて大きく、中でも広大な面積の水田を採食場所として必要とする、コウノトリ目の一部（例えばチュウサギ）は絶滅危惧種にもなっている。そこで本研究では、水田を重要な採食場所の一つにしているコウノトリ目サギ科の種の中で、個体数が多く確認できるアオサギとダイサギを対象とし、採食場所の時期的変化を調査することにより、サギ類から見た水田の役割について検討した。

Ⅱ. 調査方法 旧谷汲村に存在するコロニーを中心に、岐阜県揖斐川町から大野町にかけての全長 13km の調査ルートを設定し、ルートセンサスを行った。サギが採食場所として利用すると予測される、水田(57.27ha)、河川(22.97ha)、休耕田(35.32ha)、畑(4.38ha)、ビオトープ(2.65ha)、ファームポンド(1.60ha)、水路(0.54ha)がこの調査ルート沿いに存在している。なお、ビオトープとは休耕田を利用したビオトープ水田や、ホトケドジョウなどの保護湿地のことである。調査は平成 19 年 7 月から 11 月の期間を通して、サギの採食行動が最も盛んな日出後 4 時間以内に行うため、朝 8 時から調査を行った。車を用い、平均時速 20~40km で走行しながら、車中から双眼鏡を使用して調査員 3 人でサギの個体を確認し、必要事項をデータシート(図 1)に記入した。また時期的分布を調べる為に、個体が確認された場所を地図上にプロットした。

Ⅲ. 結果及び考察 調査開始時（7月）には、採食場所ごとの平均個体密度はアオサギ・ダイサギともに水田で最も多く、水田内ではサギの餌となるカエルやオタマジャクシ、多くの昆虫が確認できた。この時期にはアオサギの繁殖と巣立ちが確認され、水田がアオサギに重要な採食場所を提供し、繁殖・生育を支えていることが分かった。しかし、調査期間を通してみると平均個体密度は、水田（アオサギ 0.133 匹/ha・ダイサギ 0.131 匹/ha）よりもビオトープ（アオサギ 0.698 匹/ha・ダイサギ 0.723 匹/ha）の方が多かった。これは水田よりもビオトープの方が、常時魚類などの餌が一定量存在しているからだと考えられる。しかし、ビオトープは水田に比べて面積が小さく、多くのサギを養うことはできない。よって、夏季に関して言えば水田が最も重要な採食場所であり、サギが生息していくためには必要不可欠であると言える。

日付	時間	天気	電燈・窓体数	庭辺環境	観察地点	水深	草丈	水田の状況	備考
7月8日	8時	曇り	タイサギ×3	豆がかなり生えている	①	④	①	代掻き後	羽を回って、エサを探しているようだった。一羽は羽草中。

観察地点 ①水田内②水田の畦③あぜ道④川岸⑤堤防⑥河川内⑦河川内の石⑧ビオトープ⑨魚道⑩ファームロード⑪水路⑫休耕田⑬畑

水深、草丈は右図参照

图 1